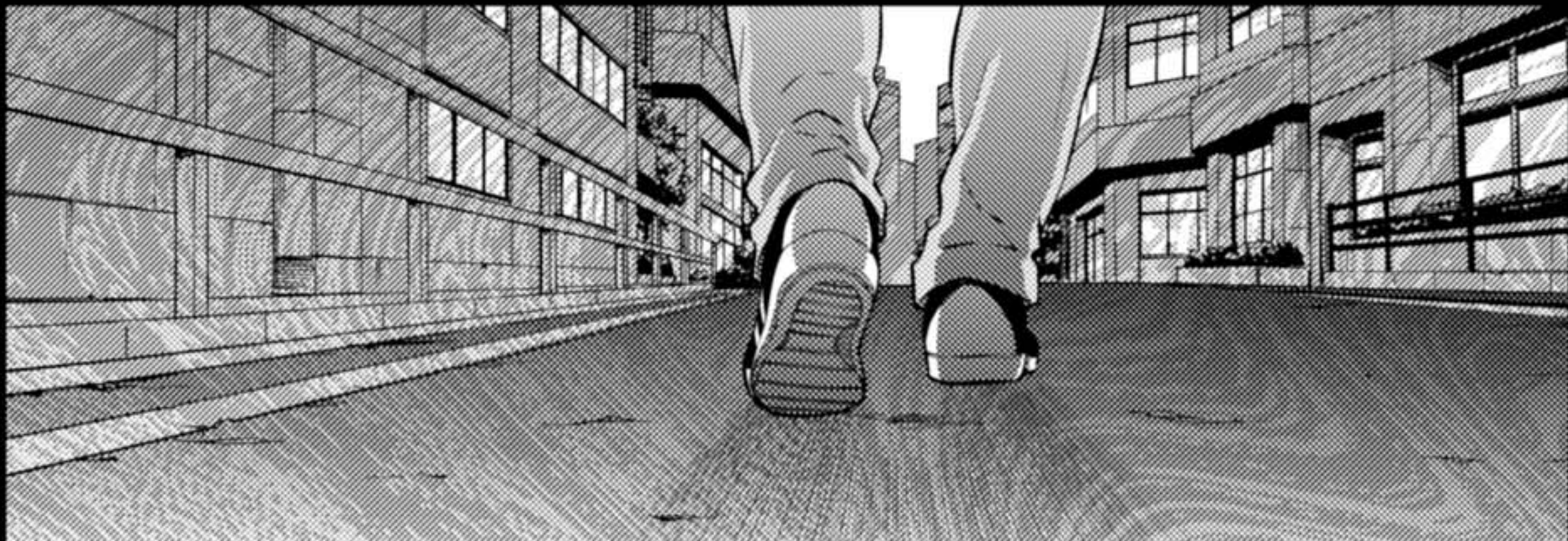


あか
赤い



塗りつぶされた
ような

赤い空気

眼球が痛い

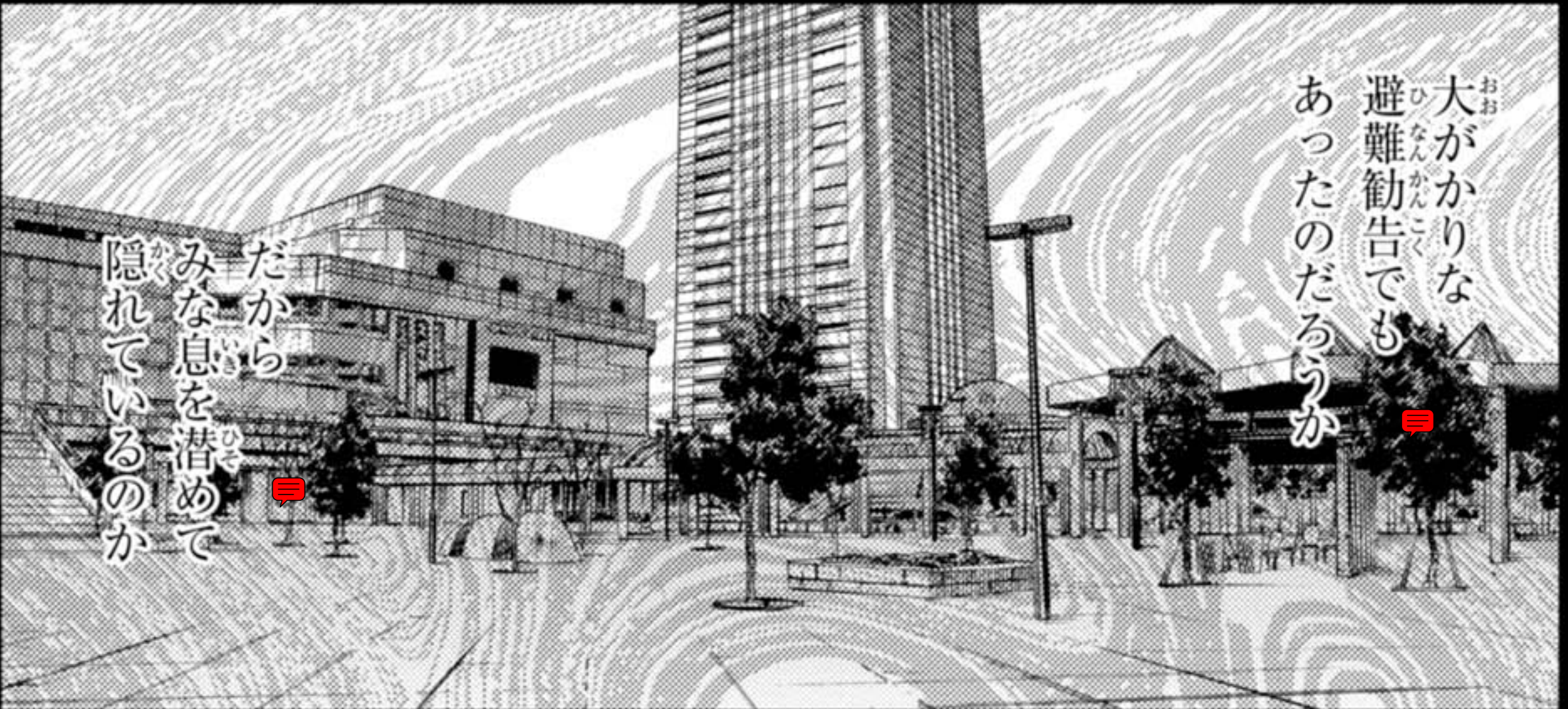
町は無人

「逃がさない」



めまい
目眩がする

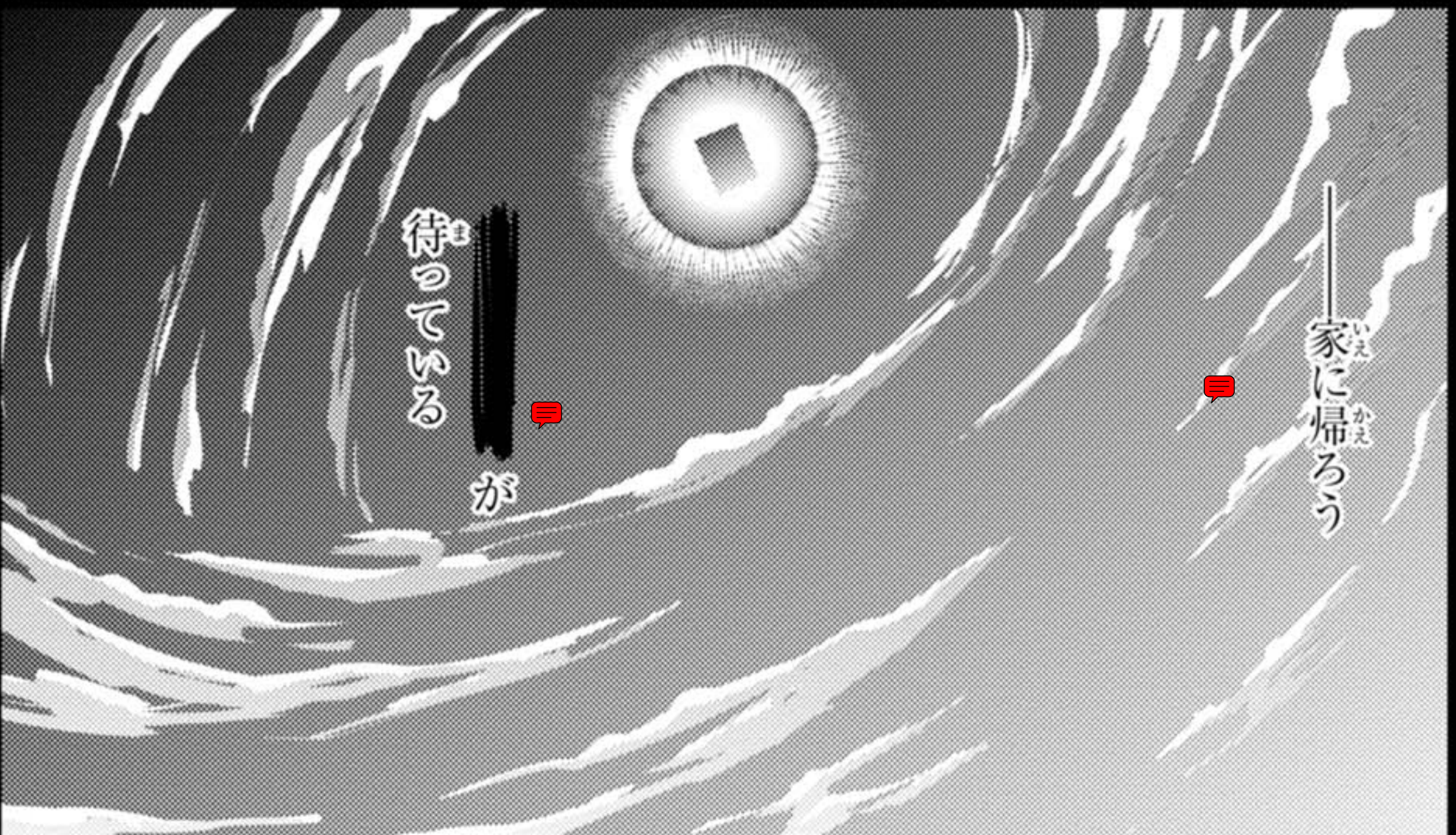
あかいろ
この赤色の
せいだ



おお
大がかりな
避難勧告でも
あったのだからか

だから
みな息を潜めて
隠れているのか

それとも
元から誰も
いないのか



いえ
家に帰ろう

待っている
が



あれは



ガッ

ガッ



とおさか
遠坂だ



おお
とおさか
遠坂！

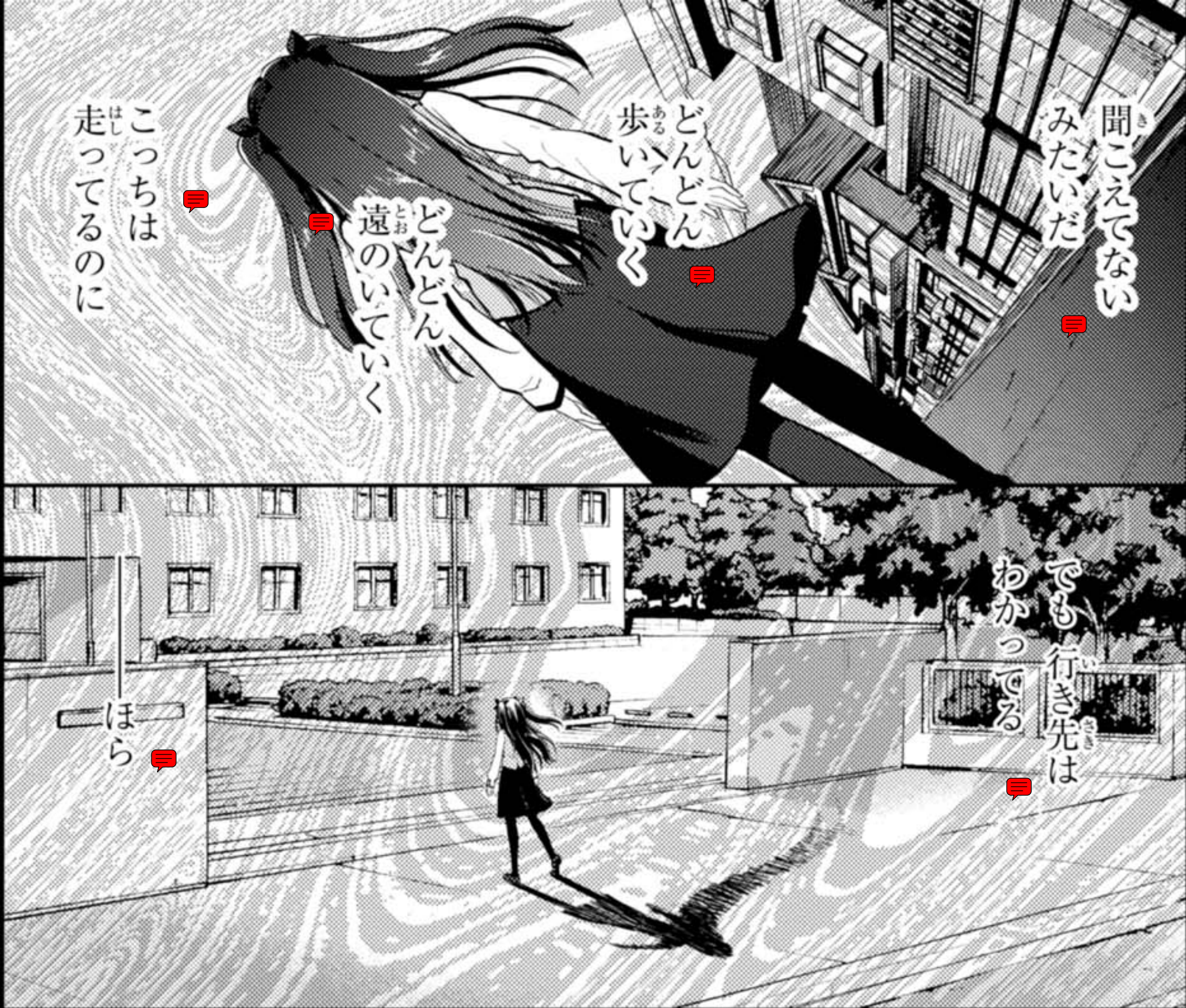


ま
待って
とおさか
遠坂！



おお
い





聞こえてない
みたいだ

どんだん
ある
歩いていく

どんだん
とお
遠のいていく

こっちは
走ってるのに

でも行き先は
わかってる

ほら

人気のない
校庭

あめざいく
飴細工
みたいな
校舎

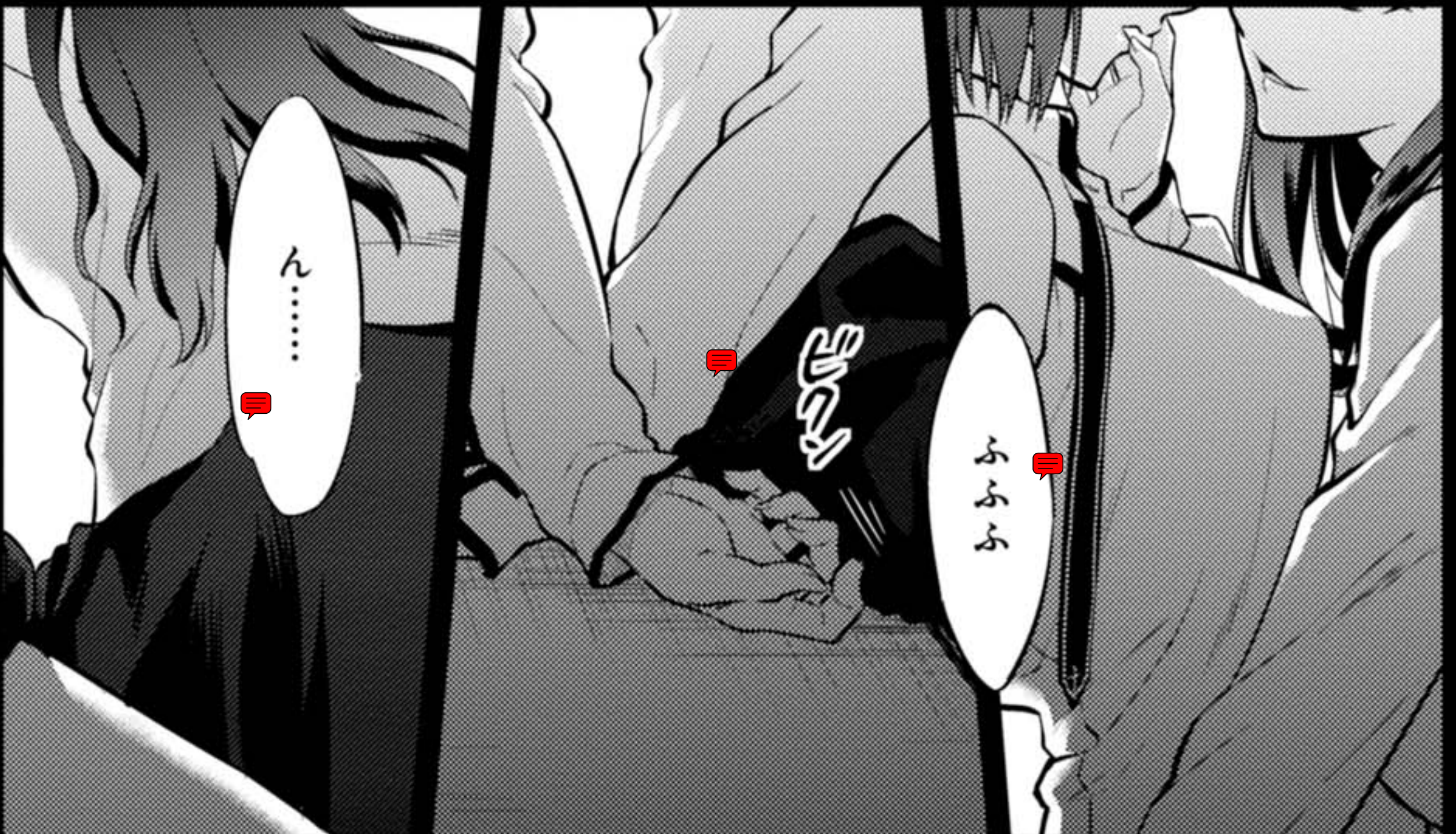
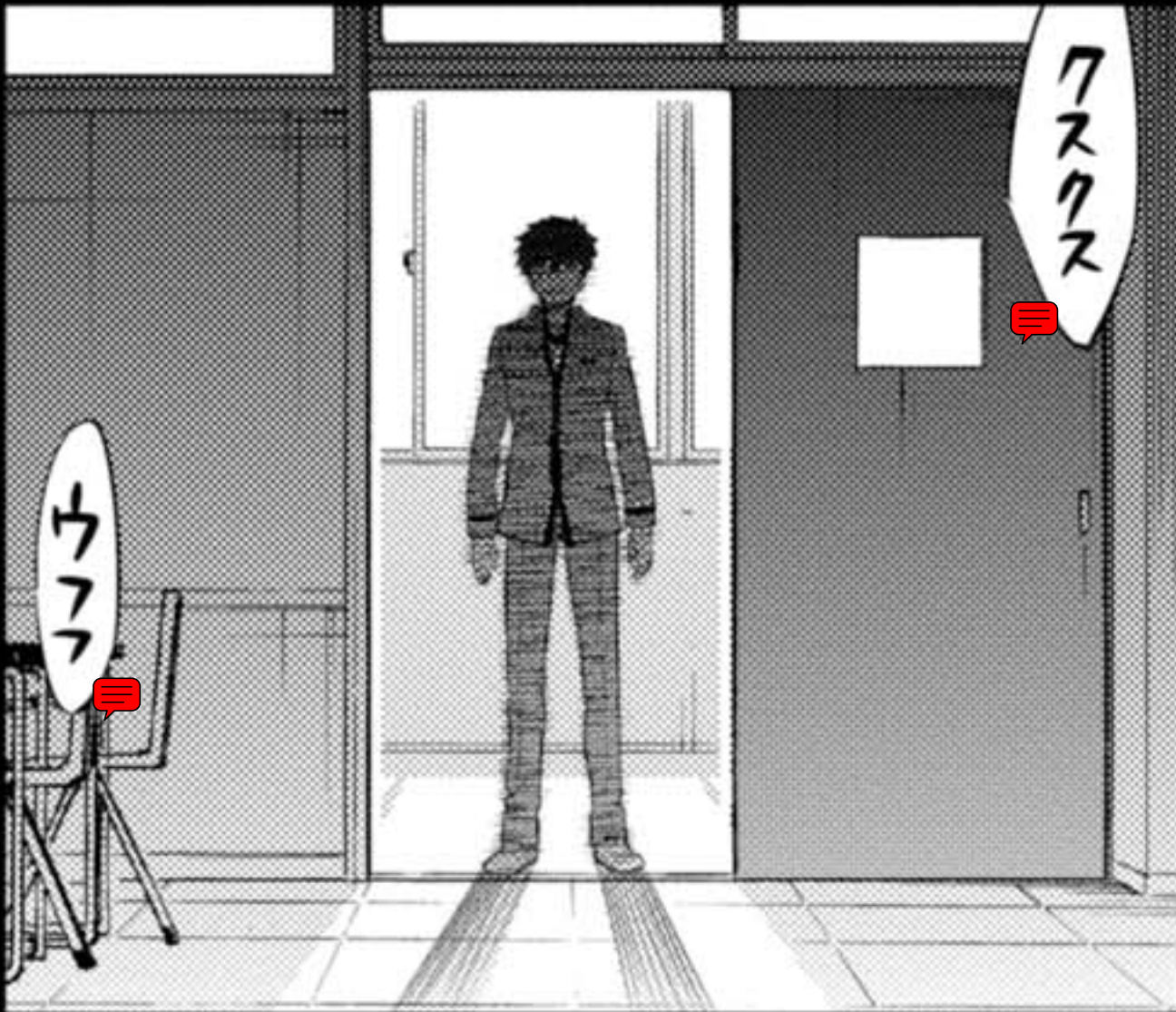


クスクス

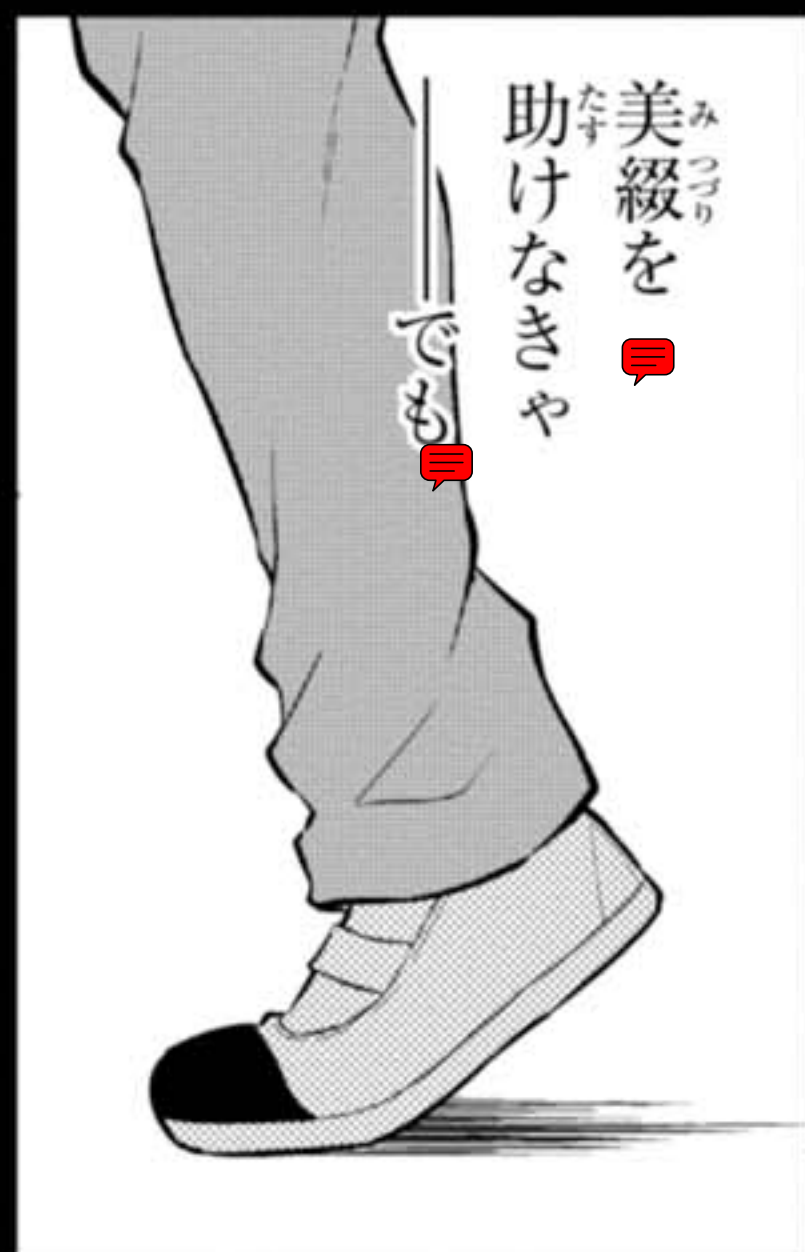
フフフ

ウフフッ

ツツ







よかった

期待に満ちた声

どうしたの？

ペロッ

万華鏡の中にいるようだ

わたしのことが怖い？

来てくれたのね

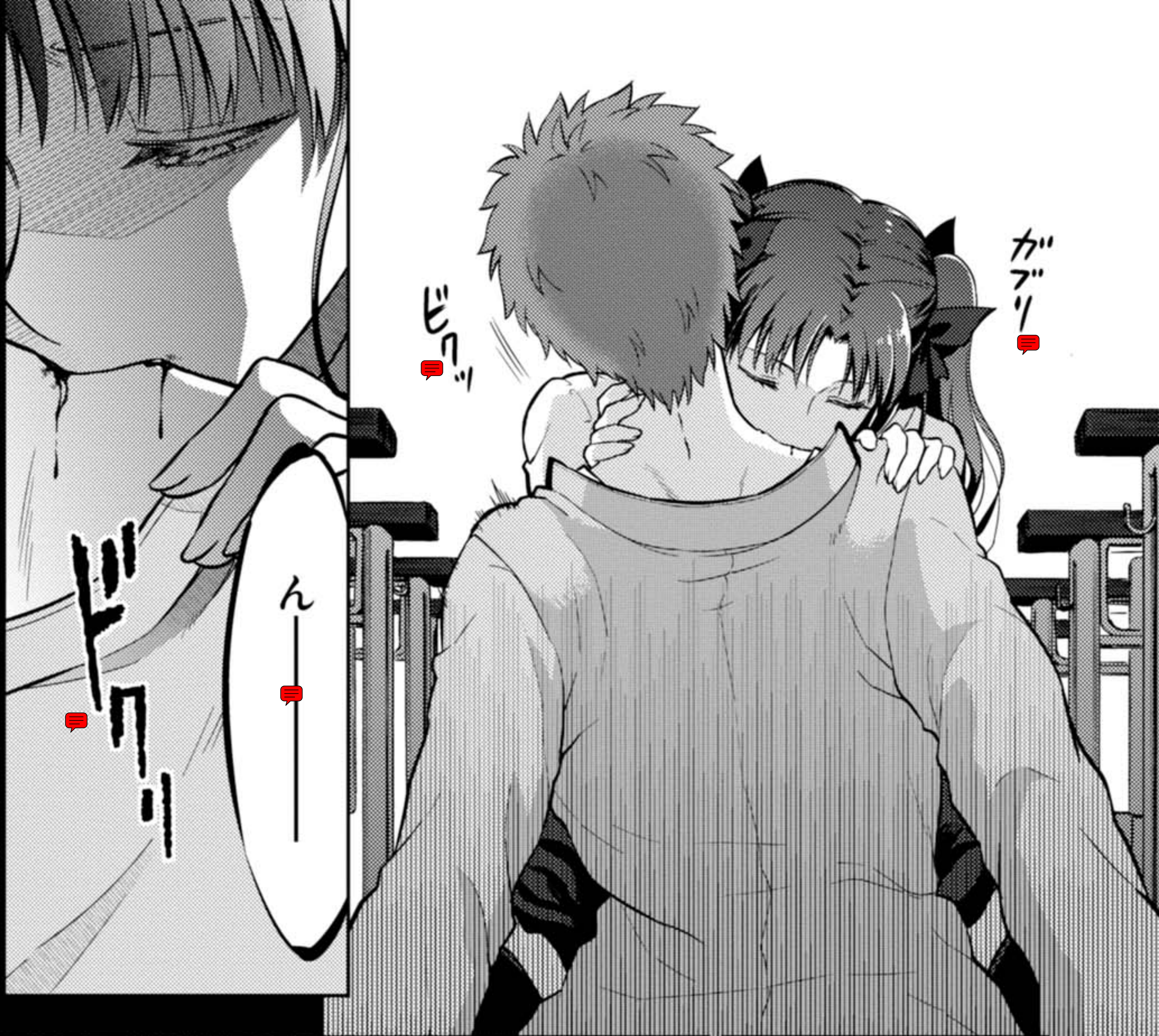
衛宮くん

思考はマヒしていく

体の自由は

とつくに利かなくなってる





ガブリ

ゴク

ん



いた
痛みはない

ドクン

あ……ん

だから獲物^{えもの}は
食^くわれている
のに

蜘蛛^{くも}は獲物^{えもの}を
仕留^{しと}める時^{とき}まず
麻酔^{ますい}毒^{どく}を打^うつという

ドクン

おいしい……

ゴクン

恍惚に
落ちていくのだ

さあ……

いつも
みたいに

あ

ふふ
乱暴なんだ

今日の
衛宮くん

ねえ

見て――

わたしを
好きにしているのよ

わたしもう

こんなになってる

目眩がする

とおさか
遠坂の匂いが
じゅうまん
充滿する

だあめ

4
3
2
1

みつ
蜜に誘われる
むし
虫のように
す
吸いつけられる

それじゃ
いつもと
変わらないでしょ

ね

後ろから
わたしを犯して

ッッ...

やだ....

衛宮くんの

あー.....!

おっきい

でんりゅう
電流のような
快樂

あつ
熱い

いしき
意識が真っ白に
ぬ
塗りつぶされていく

は
吐きそうに
なる

どうしたの
……？

わたしのなかに
こないの
えみや
衛宮くん……？

めまい
目眩が
つよ
強くなる

もっと

あはっ
そう

はいつて

んっ……！

夢^{ゆめ}にしては
あまりにも
現実^{げんじつ}味^みがあり

へんに
なりそう

はん

現実^{げんじつ}では
起こ^おりえない
光景^{こうけい}

衛宮^{えいぐう}くんの
がなかに

が

あん

思考^{しこう}が
塞^{ふさ}がれていく

ふあ

この

はっ

とびきり
上等^{じょうとう}な

あはっ

あは

犬^{いぬ}みたい

気持ち^{きもち}いい

あくむ
悪夢

はっ



いいわ……出して^だ

わたしっ……

えみや
衛宮くんの
ほしい……!



ん
ああ
あつ
熱い……っ

んっ

ドン

バチン

ドン

ドン

ドン

ドン

なんだ

やっぱり夢だ

だってこんな量は
ありえない

止まらない

……

止まらない

さいげん
際限のない
かいらく
快樂

こんなに
いっぱい

こんなの
拷問だ

なかで

どろどろ
してる……

ないぞう
内臓も
けつえき
血液も
なが
流れ出て



から
空っぽになる

——
えみや
衛宮くん
続けましょう



これで動けたら
人間じゃない

——
そう

じゃあ次は
わたしの番



無理だ

体液のほとんどが
なくなったんだ



意識が
遠のく

もっと

気持ち良くなり
たいでしょう
……？





これ以上
出すものはない

求められても
もう何も

っ……ハ



あ…やん

あ

はっ

こ

……かな
……?



ちから

できるだけ
抜いてる……

ゆずっ

ハッ

はん

ゆずっ

気持ち
いいかな
……?

んっ



ゆつたりとした
無垢な奉仕

ハ

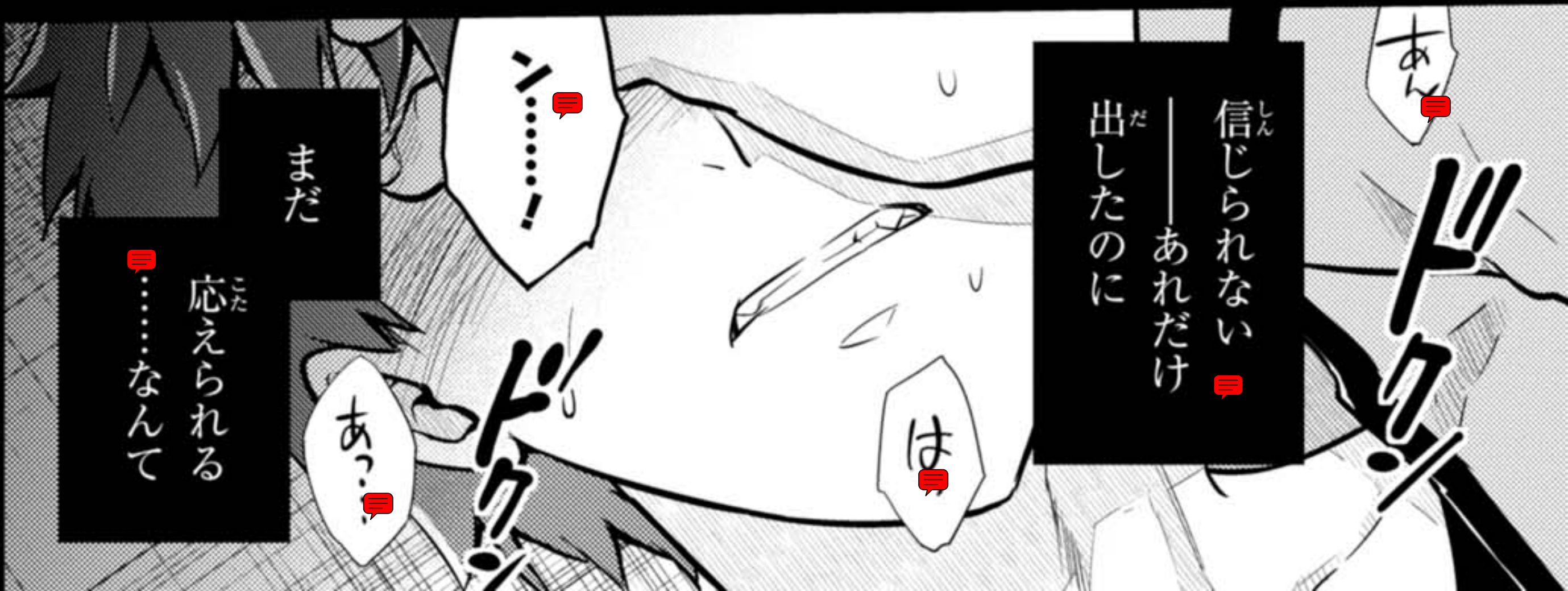
苦しい
の……?

衛宮
くん

責められる
ような快感に
気が遠くなる

まって

すぐ



信じられない
——あれだけ
出したのに

は

……!

まだ

……なんて
……なんて

あっ……



動かないで
……っ あっ

ハッ

からあ……

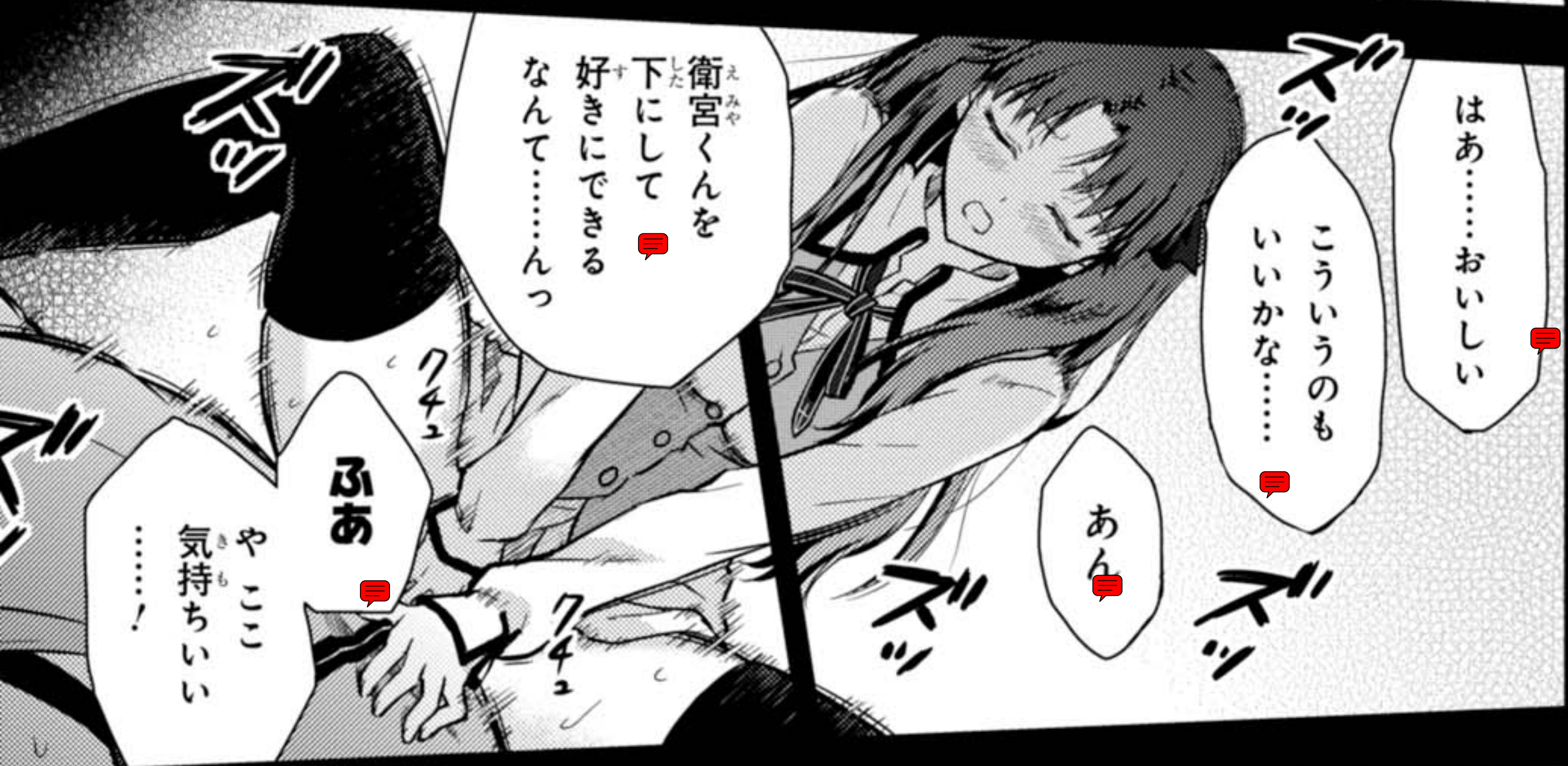
ハッ

ハ



あは……やっぱり
物足りなかった
んだほら

衛宮くんの……
もう元にも
戻っちゃった



はあ……おいしい

こういうのも
いいかな……

あん

衛宮くんを
下にして
好きにできる
なんて……んっ

ふあ
や……こ
気持ちいい
……!



やだ
ふあっ

指とまらない
——もう

もう
わたしのなか

衛宮くんの
だけでっ
いっぱい
なのに……!



あはっ…!?

っ!!

ガッ



いっ

だめえ

やあ…っ

いっ

アッ

わた
わたしのなか

あつてっ……
もう—



はうあつ

え

あつ

えみやくんの

奥まで
来てっ……

禁忌を犯す

脳髓が焼ける

神経に吸いつく無数の針

危険、危険

蛭のように舐め上げてくる 遠坂の腔

堪えろ、危ない、これ以上

快樂に流されてしまったら

だめなんだから
そんなの――

!?

ハッ

ハッ

ハッ

衛宮くんは
こいで

わたしに
食べられるんだから

ゴッ

7ッ

あは――

ハア

ん

おいし……

ハア……

ゴゴゴ

この夢は
ここで終わり――

ん……

ゴゴゴ

キラキラ

限界だ

衛宮くんの
精子

ハア

活きがよくて
くすぐったい
……

もう一掴みだって
残ってない

これで……

やっと眠れる

もっと



もいといっぱい

ほしの—

止まらない

まだ満足できない

もい

モット

はん

あ

ん

め

ハッ

そう……んっ

なが
長い夕暮れ

すてき
素敵よ
えみや
衛宮くん——

えい
永遠に
き
切り取られたような
きょうしつ
教室で

ハッ

おれ
俺は遠坂と
と
溶け合っていく

あなた
貴方なら

ハッ

このまま優しく
尽くしてあげる
……

この夕暮れが
終わるまで

覚めない夢の中に
いる

■闇にのまれる…。

12月号に続く